

メタ言語的否定と言語現象：Before節中の過去完了形再考

西岡，宣明
九州大学人文科学研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/6791148>

出版情報：九大英文学. 50, pp.299-316, 2008-03-31. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



メタ言語的否定と言語現象 —Before 節中の過去完了形再考—

西岡 宣明

1. 序

英語には(1)のように A before B という形式で A、B のいずれかが過去形で、もう一方が過去完了形で表される場合がある。

(1) a. I had bought a car before he bought one.

b. I bought a car before he had bought one. (Declerck 1979: 720)

このうち、(1a)は論理的であるが、(1b)は非論理的であると考えられるかもしれない。それは、(i) A before B という形式は、A、B の生起順序として A が B より先に起こった (A > B で表す) ことを意味し、(ii) 過去完了形、過去形の使用により、過去完了形で表す出来事の方が過去形で表す出来事より先に起こったことを表すとしたら、A に過去完了形、B に過去形が使われている(1a)は、A > B であるのに対して、その逆である(1b)は A < B を表し、(i)と(ii)の間で矛盾が生じるからである。

Declerck (1979)は、(1b)のような形式 (A (過去形) before B (過去完了形)) の文の特徴として、以下のような興味深い事実を述べている。¹

① A before B において B が先に起こり得ない場合は容認できない。

(2) a. The executioners buried John before he had died.

b. *John wrote a novel before he had died. (ibid.: 725)

(2a)のように、人が死んでから埋葬するというのは通常のことであるが、(2b)で表される人が死んでから小説を書くことは通例、起こり得ないので(2b)は容認されないということである。

② before 節中に過去形を用いた場合との解釈の違いがある。それは(3)(4)のような例に対して(5)のようにまとめられる。(Cf. 川瀬

(1989:112))

- (3) a. The general tortured his prisoners before he interrogated them.
b. The general tortured his prisoners before he had interrogated them.

(ibid.: 727)

- (4) a. John dived into the swimming-pool before Mary put water in it.
b. John dived into the swimming-pool before Mary had put water in it.

(ibid.: 728)

- (5) a. **before** 節中に過去形を用いた(a)にはその出来事(B)が実現した含意があるが、過去完了形を用いた(b)にはその含意はない。

- b. **before** 節中に過去完了形が使われている(b)では、A **before** B で表されている出来事の前後関係が逆の B **before** A である可能性が示唆される (B が A より先に起こることを想起させる) がそうはならなかったことを伝えるが、**before** 節中に過去形が使われている(a)ではそのような読みはない。

すなわち、(3a)(4a)では、B の出来事 (「彼の尋問」「メアリーがプールに水を入れたこと」) が実際に生じたことが含意されるのに対して、(3b)(4b)にはその含意がなく、代わりに(3b)(4b)では、B の出来事が A より先に生じる可能性 (「捕虜を尋問してから拷問する」「プールに水を入れてから飛び込む」) が生じなかったことを伝えるが、(3a)(4a)にはそのような意味がないということである。

- ③ **before** に修飾語が付くと過去完了形は使えない。

- (6) a. The flowers were frozen before they had blossomed.
b. *The flowers were frozen a couple of days before they had blossomed.

(ibid.: 740)

(6b)のように前後関係の詳細を明示する修飾表現がつくとこの形式の文は容認されない。

本稿では、A (過去形) **before** B (過去完了形)の形式の文がもつ①～③の特徴の説明に対して否定文の考察が有効であることを論じる。特に、メタ言語的否定(metalinguistic negation)と呼ばれる語用論的否定の考察がその鍵となることを示唆する。そのため、次節でメタ言語的否定の

特性を詳しく考察し、3 節でメタ言語的否定分析を援用することで①～③の特徴が説明できることを論じる。4 節で論をまとめる。

2. 語用論的否定—メタ言語的否定

2.1 否定の統語的特質

英語の否定文にはいくつかの統語的制約があるが、その統語的制約に従わない否定文が存在する。まず、通例の否定文においては *not* の生起位置が限定されており、(7a)のように名詞表現の前には生じない。ところが、(7b)のような文は何の問題もない。

(7) a. *I saw not Chris.

b. I saw not Chris but Pat. (Horn 1989: 403)

次に、英語の否定文は(8a)のようにそのスコープ内にある *any* のような否定対極表現(negative polarity item: NPI)を認可する。ところが、(8b)のような否定文においては、NPI は認可されない。(以下の例において、下線は強勢があることを表す。)

(8) a. John didn't eat *anything*. (cf. *John ate anything.)

b. Chris didn't manage to solve some/*any of the problems—he managed to solve all of them. (Horn 1989: 374)

また、英語の否定文は通例、(9a)のようにある語彙項目(e.g. *some*, *most*, *several*...)をスコープ内にとる解釈をもてないのであるが、(9b)のような否定文においては、このような語彙項目が否定の焦点となっている。

(9) a. John didn't solve *some/most* of the problems. (Kroch 1974: 112)
some/most > NEG のみ

b. I didn't solve some/most of the problems—I solved all of them.

同様に、(10a)のように英語の否定文は通例、*not* の前の位置(主語位置)にある存在数量詞を否定の焦点(部分否定)とすることができない。

((10)-(12)において、#は部分否定の解釈がないことを表す。)ところが、(10b)では、同じ統語位置で存在数量詞が否定の焦点解釈を受ける。

- (10) a. #Many of the children did not go to school yesterday. (Kroch 1974: 148)
(Cf. All of the children did not go to school yesterday.)

b. Many of the students didn't attend the party. All of them attended it.

さらに、英語の否定文は、(11a)(12a)のように通例、統語的島の中にある数量詞を否定の焦点(部分否定)とすることができないのであるが、(11b)(12b)は、ある種の否定においては、このような統語環境においても数量詞が否定の焦点解釈を受けることが可能であることを示している。

(Cf.に示した例の *t* は *wh* 句の移動する前の位置を便宜的に示したものである。) (11)は、特定の主語(所有表現)を持つ名詞句内に数量詞があり、(12)は等位構造中に数量詞がある例である。これらは、いずれもその中からの要素の移動を禁じる統語的「島」を構成する構造である。

- (11) a. #I didn't understand Euclid's proofs of many of the theorems.

(Cf. *Who did you see Mary's picture of *t*?)

b. I didn't understand Euclid's proofs of many of the theorems;
I understand his proofs of only a few of them.

- (12) a. #I didn't talk to Chomsky and all of his colleagues.

(Cf. *Who did you see Mary and *t*?)

b. I didn't talk to Chomsky and all of his colleagues; I talked to
Chomsky and most of his colleagues.

(Lasnik 1972: 85)

以上(7)~(12)の(b)の例はいずれも、先行する発話、想定を否定して訂正する機能を有するもので、Horn(1989)が通例の否定と区別してメタ言語的否定と呼んだものである。² メタ言語的否定は、(13)のように発音((13a)、形態((13b, c))のような言語表現そのものを訂正する他、(14)のように数量詞のもつ含意、(15)のように(生起・優先)順序(位)、(16)のように視点といった幅広いものを否定の焦点としうるものであり、通例の統語的制約に従わない、きわめて語用論的な否定である。

- (13) a. He didn't call the [pólis] , he called the [polís].

b. I didn't manage to trap two mongeese—I imanaged to trap
two mongooses.
(Horn 1989: 371)

- c. I'm not Trotskyite, I'm a Trotskyist. (ibid.: 372)
- (14) a. Some men aren't chauvinists—all men are chauvinists.
b. Chris didn't manage to solve some of the problems—he managed to solve all of them. (ibid.:370)
- (15) a. They didn't have a baby and get married, they got married and had a baby.
b. Mozart's sonatas weren't for violin and piano, they were for piano and violin. (ibid.: 373)
- (16) a. I'm not his daughter—he's my father. (ibid.: 371)
b. For a pessimist like you, the glass isn't half full—it's half empty. (ibid.: 372)

次節では、メタ言語的否定の本質とは何かという問題を考える。

2.2. メタ言語的否定の特質—Carston (1996)

先行研究において、メタ言語的否定の特質として、以下のようなものが挙げられている (Horn (1989), Burton-Roberts (1989), Carston (1996)参照)。

- (17) a. 矛盾を表すイントネーション (contradiction intonation contour: fall-rise)と対比強勢を伴う。
b. 先行発話 (肯定文) に対する言い返し (rejoinder) として起こる。
c. 解釈のやり直しをさせる (garden-path) 効果をもつ。
d. 文字通りに解釈すると、否定節と訂正節で論理的な矛盾を生じる。
e. 否定のスコープ内にある要素は使用されている (used) のではなく、言及されている (mentioned)。

Carston (1996) は、このうち (17e) がメタ言語的否定の本質であり、(17a-d) はメタ言語的否定の解釈に必ずしも必要ではないと論じている。まず、この点を確認しておこう。

(17a, b) がメタ言語的否定の解釈に必ずしも必要なものではないことは、以下の例により示される。

(18) This Birthday Card is NOT from one of your admirers.

It's from TWO of your admirers. Happy Birthday from both of us.

(Carston 1996: 312)

(18)の上の行の文が、バースデーカードの表書きであり、下の行の文がカードの中に書かれた文である。読み手は表書きを見て文字通りに理解して、中身を読むとその解釈が間違いであることに気づき、メタ言語的な再解釈を強いられる。この点で、上の行の文は、(17c)に即している（また、(17d)にも即している）メタ言語的否定といえるが、これは書かれた文であるので、(17a)が必要ないことが明らかである（また、大文字書きによる強調強勢の標示は、意図的に対比要素である one にはなされていない）。そして、これは(17b)に反し、先行発話に対する言い返し文でもない。このことから、(17a, b)は、メタ言語的否定の本質的特性ではないことが分かる。

また、(17c)がメタ言語的否定の本質的なものではないことは、以下のような文によって示される。

(19) a. Maggie's patriotic and quixotic; not patriotic or quixotic.

b. It's downright hot out there, it's not warm.

(20) a. I'm not 'his child'; he's my father.

b. You didn't see two 'mongeese'; you saw two mongooses.

(ibid.: 313)

(19)は、否定節と訂正節との生起順序がこれまで見たメタ言語的否定の場合と逆である。従って、(17c)の特質はないが、依然として先行発話に対する異議を唱えているというメタ言語的否定の解釈は失われていない。(20)は、訂正されるべき否定の焦点要素が引用符に入れられてメタ言語的否定であることが明示されている例であり、この場合も(17c)はない。

さらに、以下の例においては(17d)の特質もない。

(21) a. He doesn't need four mats; he needs more fats.

b. X: You seem amused by my problem.

Y: I'm not amused by it; I'm bemused by it.

c. He didn't eat three of the cakes; he ate four. (ibid.: 315)

(21a, c)と(21bY)の文は、メタ言語的否定の例であるが、これらを文字通り記述的に解釈しても、訂正節との論理的矛盾はない。このことから、(17d)もメタ言語的否定の本質的特質ではないことが示される。

次に、(17e)について考えてみよう。ここでいう「言及」(mention)と「使用」(use)の区別は(22)により、端的に示される。

(22) a. These examples are rare and marginal. (use)

b. “Marginal” is a technical term. (mention)

(Sperber and Wilson 1981: 303)

(22a)において *marginal* という語は、*these examples* の特質を記述するのに使われているのに対して、(22b)では *marginal* という表現そのものについて述べられている。言及は、このように典型的な場合、引用符（あるいは話し言葉では、それを示すジェスチャー）で明示されるのであるが、引用符を伴わず、文（命題）に対してなされる場合もあり、さらに直接対話者が述べたことではなく、含意内容や、相手が述べるであろう発話（あるいは、考え）を先取りして言及する場合もある。(23)が命題の繰り返し言及の例であり、(24)が含意に対する言及の例である。また、(25)が先取りして言及した例である。

(23) A: I've got a toothache.

B: Oh, you've got a toothache. Open your mouth, and let's have a look.

(24) A: I'm a reasonable man.

B: Whereas I'm not (is what you're implying).

(25) You're going to do something silly. *You're free to do what you want* (you'll tell me). Maybe so. But you still ought to listen to me.

(ibid.: 306, 307)

このような（繰り返し）言及の多様性を踏まえた上でCarston (1996) は、メタ言語的否定の本質は、Sperber and Wilson (1981, 1986)³, Wilson and Sperber (1988, 1992)のいう「繰り返し言及(echoic mention)」が否定のスコープ内でなされたものであるとして、(17e)がメタ言語的否定の本質であることを主張するのである。これまで挙げたメタ言語的否定の例に照らして、この点を検証してみよう。まず、2.1

節で見た例を便宜上(26)-(30)に繰り返す。

- (26) a. I saw not Chris but Pat. (= (7b))
b. Chris didn't manage to solve some/*any of the problems—he managed to solve all of them. (= (8b))
c. I didn't solve some/most of the problems—I solved all of them. (= (9b))
d. Many of the students didn't attend the party. All of them attended it. (= (10b))
e. I didn't understand Euclid's proofs of many of the theorems; I understand his proofs of only a few of them. (= (11b))
f. I didn't talk to Chomsky and all of his colleagues; I talked to Chomsky and most of his colleagues. (= (12b))
- (27) a. He didn't call the [pólis], he called the [polís]. (= (13a))
b. I didn't manage to trap two mongeese—I managed to trap two mongooses. (= (13b))
c. I'm not Trotskyite, I'm a Trotskyist. (= (13c))
- (28) a. Some men aren't chauvinists—all men are chauvinists. (= (14a))
b. Chris didn't manage to solve some of the problems—he managed to solve all of them. (= (14b))
- (29) a. They didn't have a baby and get married, they got married and had a baby. (= (15a))
b. Mozart's sonatas weren't for violin and piano, they were for piano and violin. (= (15b))
- (30) a. I'm not his daughter—he's my father. (= (16a))
b. For a pessimist like you, the glass isn't half full—it's half empty. (= (16b))

(26a)は、おそらく対話者が発したYou saw Chris.という文(あるいは、誰か他の人が言ったX saw Chirs. (Xは、(26a)の発話者の名前)に繰り返し言及し、それを否定したものである。(26b)も、Chris managed to solve

some of the problems.に繰り返し言及し、それを否定、訂正したものである。ここで、anyではなく、someが使われている理由は言及した元の文が肯定文であり、メタ言語的否定の焦点となっていることによる。同様に(26c, d)において、通例否定の焦点とならない数量詞が否定の焦点となっているのは、繰り返し言及した文が肯定文であるために生じたものであり、それを否定したものであることによる。(28)も同様の例である。すなわち、メタ言語的否定は、繰り返し言及した発話の否定の焦点となる部分には修正を加えずに提示するものである。⁴ (26e, f)も、繰り返し言及し、それを否定、訂正したものであるが、この例は、繰り返し言及したものはその統語構造に関わらず、否定の焦点とすることが可能であることを示す興味深い例である。(27)は、言語表現そのものに繰り返し言及を行い、それを否定、訂正するメタ言語的否定の典型とも言えるものである。(29)(30)は、言語表現そのものというより、その提示の仕方を否定したものであるが、同様に先行発話に繰り返し言及することにより、それを行っている。

さらに、本節で見た(19)-(21)に関してもすべて同様に、繰り返し言及による否定であることが容易に確認できる。しかし、(18)に関しては少し説明を要する。((18)を(31)として以下に繰り返す。)

(31) This Birthday Card is NOT from one of your admirers.

It's from TWO of your admirers. Happy Birthday from both of us. 一行目の文がバースデーカードの表に書かれたメタ言語的否定の例であるが、これに対する先行発話は存在しない。しかし、バースデーカードをもらった受け取り手は普通、自分に少なからず好意を寄せている人からのものであると考える。すなわち、This birthday card is from one of my admirers.ということを想定するであろう。(31)はこの想定に対して繰り返し言及し、それを否定したものである。

以上のように、メタ言語的否定とは、Carston (1996)が主張するように否定のスコープ内に先行発話の言語表現や誰かに帰せられる発話や思考内容そのものを繰り返し言及し、表示するものであることが確認できる。そして、繰り返し言及するものは、言語表現そのものであれ、命題

(思考内容)であれ、いわば引用的に固定化した側面を含み、その内部の統語構造を見ずに否定の焦点とすると言える。本稿では、本節の考察を踏まえ、以下便宜的にメタ言語的否定を(32)のような構造を持つものとして提示する。

- (32) NEG “(...)FOCUS(…)” (ここで“ ”は繰り返し言及であることを示し、(...))はその中に否定の焦点以外の要素も含まれうることを表す。)

2.3. メタ言語的否定とアイロニー

2.2 節でメタ言語的否定の本質的要因として、繰り返し言及があることを見た。その説明において述べたように言語分析において繰り返し言及の重要性をもともと指摘したのは、Sperber and Wilson (以下S&W)(1981)である。そこで、本節では、S&W (1981)が繰り返し言及に基づいておこなったアイロニー(irony)分析の要点を述べ、メタ言語的否定との関連性を考察する。

(33)は、雨具を持たずに散歩に出かけた話者がどしゃ降りの中で発した場合、発話者に文字通りの意味を伝える意図はなく、明らかにアイロニー表現である。

- (33) a. What lovely weather!

b. It seems to be raining.

c. I'm glad we didn't bother to bring an umbrella.

(S & W 1981: 300)

S&W (1981)は、これらの文は、対話者あるいは自分が、家を出る時に実際に発した、あるいは、思ったこと(「なんていい天気だ」「(ちょっと)降っているようだ」「わざわざ傘を持っていかないでおこう」)を繰り返し言及し、状況(文脈)との明らかなズレや無関係さによりその発話に対する話者の態度を表わしたものであると主張する。つまり、アイロニーの解釈(効果)は、話者が述べた命題内容に対して距離をおいていること、すなわちその発話は命題内容を伝えるために使用されているのではなく、繰り返し言及されていることを聞き手が状況(文脈)に照らして正しく理解した場合にのみ可能となるのである。

以下の例も同様に分析できる。

- (34) a. Go on Jeremy, your story's really interesting.
b. Of course all classical music sounds the same!
c. Brutus is an honorable man.

(*Julius Caesar*, Act III, ii, Mark Antony の台詞)

(S & W 1981: 313, 314)

(34a)は得意げに話をしている Jeremy に対してうんざりした話者がアイロニーとして発したものであるが、この場合 Jeremy の心中の見解 (My story is really interesting.) を繰り返し言及していると言える。(34b)はクラシックファンの話者が退屈そうに聞いている聞き手に対して発したアイロニーであるが、これは、聞き手の気持ち(all classical music sounds the same)を繰り返し言及したものである。(34a, b)いずれも、聞き手はアイロニーであることに気づかない場合もありうる。(34c)は、Brutus の許可を得て民衆の前で行った Antony の Caesar の追悼のための演説中の台詞であり、演説中に 6 度繰り返されている。民衆は、最初これを文字通りに理解しているが、Caesar がいかにすばらしかったかという文脈を作り上げながら(34c)を差し入れていく Antony の演説により、Caesar を殺害した Brutus に対して次第に反感を覚えるのである。すなわち、これは、最初アイロニーに気づかなかった民衆に、文脈により、次第に(34c)が Antony の本心ではなく、Brutus の支持者の考えの繰り返し言及によるアイロニーであることを Antony の Brutus に対する敵対心とともに気づかせる例である。

アイロニーをこのように分析すると、2.2 節でみたメタ言語的否定との共通性が見えてくる。メタ言語的否定は、繰り返し言及したものを否定のスコープ内に提示するものであり、(32)のように表されたが、アイロニーも同様に(35)のように表される。

- (35) NEG-Context “(...)FOCUS(…)” (ここで“ ”は繰り返し言及であることを示し、(...)はその中に否定の焦点以外の要素も含まれうることを表す。)

すなわち、両者の違いは、メタ言語的否定の場合、繰り返し言及に対す

る否定（的態度）が not などの否定辞により明示的に与えられるのに対して、アイロニーは状況・文脈によりそれが与えられる点にある。しかしながら、このように考えるとアイロニーもメタ言語的否定の一種であると言える。

3. メタ言語的否定としての A (過去形) before B (過去完了形)

3.1 提案

1 節で述べた A (過去形) before B (過去完了形)形式の文の諸特徴の考察に入る。

(36) I bought a car before he had bought one. (= (1b))

(36)は、「私が車を買ったこと」と「彼が車を買ったこと」の生起順序が before の使用により前者が先であるにも関わらず、後者に一般に過去時制より先に生じたことを表す過去完了形が用いられているために一見非論理的に見えるというものであった。

本稿では、実はこの形式の文において非論理的な面はないことを主張する。この形式の文の考察において大江(1982)が洞察に満ちている。大江(1982: 140)は、この形式の文における before を not-after であると分析する。例えば、(37)のような文は、(38)の否定が含意される。大江はそのため、(37)での before 節内の過去完了形は、その含意に引き付けられたものであると論じている。

(37) a. I reached the station before the train had left.

b. The bell rang before we had finished our work.

c. The thief was caught before he had disposed of the stolen goods.

(38) a. I reached the station after the train had left.

b. The bell rang after we had finished our work.

c. The thief was caught after he had disposed of the stolen goods.

本稿では、大江の before を not-after とする洞察を前節までみたメタ言語的否定分析と照らして、(39a)を提案する。これは、(39b)のように表される。

(39) a. A (過去形) before B (過去完了形)の文は A (過去形) after B (過去完了形)のメタ言語的否定である。

b. [A (過去形) before B (過去完了形)] = NEG “A (過去形) AFTER B (過去完了形)”

すなわち、この形式の文は A (過去形) after B (過去完了形)である (after の持つ意味と過去完了形の意味による時間的先行関係が整合した) 論理的に矛盾のない文を繰り返し言及し、否定するものであると考える。このように考えれば、before 節中の過去完了形は、非論理的な使用ではないと言える。

3.2 分析

では、(39)が 1 節で述べた A (過去形) before B (過去完了形)の形式の文の諸特徴をどのように捉えうるかを述べる。この形式の文の特徴として、以下のものがあつた。

① A before B において B が先に起こり得ない場合は容認できない。

(40) a. The executioners buried John before he had died.

b. *John wrote a novel before he had died. (= (2))

(40)の文はそれぞれ、(39b)に基づいて表すと、以下のようになる。

(41) a. NEG “The executioners buried John AFTER he had died”

b. NEG “#John wrote a novel AFTER he had died”

(41a)に示されるように「人が死んだ後に埋葬されること」は通常のことであるが、(41b)のように「人が死んだ後に小説を書くこと」は語用論的に通常起こりえないことである。(ここで、#は、語用論的な奇異性を表す。)従って、前者と違い、後者の場合繰り返し言及の対象とは通常なりえず、この形式の文として容認されない。(39)の分析はこのように(40)の違いを正しく説明できる。

② before 節中に過去形を用いた場合と、(44)のような解釈の違いがある。

(42) a. The general tortured his prisoners before he interrogated them.

b. The general tortured his prisoners before he had interrogated them. (= (3))

- (43) a. John dived into the swimming-pool before Mary put water in it.
 b. John dived into the swimming-pool before Mary had put water in it. (= (4))

- (44) a. before 節中に過去形を用いた(a)にはその出来事(B)が実現した含意があるが、過去完了形を用いた(b)にはその含意はない。
 b. before 節中に過去完了形が使われている(b)では、A before B で表されている出来事の前後関係が逆の B before A である可能性が示唆される (B が A より先に起こることを想起させる) がそうはならなかったことを伝えるが、before 節中に過去形が使われている(a)ではそのような読みはない。 (= (5))

(42)(43)の(a), (b)の文の違いとして(44)にまとめられる違いがあった。ここで注意すべきことは、(44a)に述べられた実現の含意が過去形という形式のみに起因するものではないということである。それは、以下の文において before 節中に過去形が使われているにも関わらず、before 節中で表される出来事の実現の可能性が低い (ない) ことから伺える。

- (45) a. The bell rang before we had finished our work. (= (37b))
 b. The thief was caught before he had disposed of the stolen goods. (= (37c))
 c. John died before he saw the ambassador. (川瀬 (1989: 113))

(45)においては、主節が表す出来事と before 節が表す出来事との排他関係により、before 節内の出来事の実現性は低い (ない) のであり、before 節内の出来事の実現性は、主節が表す出来事との意味関係に依存していると言える。しかし、そのような排他関係がない(42)(43)の文の(b)の文が(a)と異なり、出来事の実現性の含意がないのは何故であろうか。(39)は、(42b)(43b)を以下のように表されるメタ言語的否定の例であると分析する。

- (46) a. NEG "The general tortured his prisoners AFTER he had interrogated them"
 b. NEG "John dived into the swimming-pool AFTER Mary had put water in it"

ここで **before** 節の出来事に対応する **after** 節内の出来事は、繰り返し言及されたものの一部であるため、話者はその実現性に関して、関与しないことがその理由であると言える。他方、**before** 節に過去形が用いられた(42a)(43a)では、それは言及ではなく使用されているために、そうではないことが出来事の意味関係等によって明示されない限りは、実現性を含意するのである。

また、(44b)に述べられるように **before** 節内に過去完了形が使われた **A before B** が **B before A** とならなかったことを伝えるというのは、**B before A** は **A after B** とほぼ同義であるので(39)が提案するように **NEG “A AFTER B”** で **A after B** が言及され、否定されるという分析より正しく捉えられるものである。

さらに、(6)のようにこの形式の文では **before** に修飾語がつくことはできないという事実も(39)に基づく分析は正しく捉える。((6)を(47)として繰り返す。)

③ **before** に修飾語が付くと過去完了形は使えない。

(47) a. The flowers were frozen before they had blossomed.

b. *The flowers were frozen a couple of days before they had blossomed.

これは、(48)に示すように **before** と **NEG after** の含意関係は、**before** に修飾語が伴わない場合は成立するが、修飾語が付いた場合成立しないことに起因する。修飾語がつくことにより、単なる2つの出来事の前後関係のみではなく、明確な時間関係が指定されるからである。この点は、(49)のような文を考えてみると明らかになる。

(48) a. **A before B** ⇔ **NEG (A after B)**

b. ***A two days before B** ⇔ **NEG (A two days after B)**

(49) a. John met Mary before he met Sue. ← It is not the case that John met Mary after he met Sue.

b. *John met Mary two days before he met Sue. ← It is not the case that John met Mary two days after he met Sue.

(49b)のように2つの出来事の細かな前後関係が表されていると、逆の前

後関係を否定しても元の前後関係が含意されないのである。従って、(39)が主張するように、A (過去形) before B (過去完了形)の文が before と NEG-after の含意関係に基づく A (過去形) after B (過去完了形)のメタ言語的否定であるならば、その含意が成り立たない(47b)の非容認性は自然に説明できる。

4. まとめ

本稿は、A (過去形) before B (過去完了形)の形式の文の特徴の説明にメタ言語否定に基づく考察が有効であることを論じた。まず、メタ言語的否定の本質を考え、それが、先行発話や想念を繰り返し言及したものを否定することにあることを確認した。また、その特質はアイロニーの本質的特性であることも確認した。そして、A (過去形) before B (過去完了形)の形式の文が実は、before と NEG-after との含意関係に基づく A (過去形) after B (過去完了形)のメタ言語的否定であることを論じた。以上のように本稿の考察は、メタ言語的否定は、従来メタ言語的否定として扱われてきた否定辞による場合以外にも、状況 (文脈) によって否定が示される場合 (アイロニー) や、語の含意関係に基づき否定が生じる場合 (A (過去形) before B (過去完了形)) もあり、多様な姿で我々の言語現象に浸透していることを示すものであった。

註

- ¹ Declerck (1979)はこれらの特徴を説明するのにこの形式の文のbefore節中の過去完了形は、現実起こったものとしてではなく、単に思い描いたものの想定であることから生じるback-shiftによる仮定法であると論じている。しかし、Declerck (1979)の仮定法分析は、仮定法の概念を通常よりかなり拡張しなければならない無理がある。Declerck (1979)の分析の批判的論考として、川瀬 (1989)、松村(1989)、江口(1989)を参照。
- ² これは、太田(1980)の“echo negation”やQuirk et al. (1985)の“denial”に対応するものである。

- ³ Carston (1996)は、Sperber and Wilson (1981)には言及していないが、Sperber and Wilson (1981)においても「繰り返しの言及」的考察の重要性が論じられている。
- ⁴ 言及発話の焦点以外の部分には話者の修正が可能であることを論じたものとして、Iwata (1998)を参照。

参考文献

- Carston, Robyn (1996) "Metalinguistic Negation and Echoic Use," *Journal of Pragmatics* 25, 309-30.
- Declerck, Renaat (1979) "Tense and Modality in English *Before*-Clauses," *English Studies* 60. 6, 720-44.
- 江口 巧 (1989) 「Before 節の完了形—その法的表現としての地位に関する考察—」『英語学の視点』大江三郎先生追悼論文集編集委員会編, 141-57. 九州大学出版会, 福岡.
- Horn, R. Laurence (1989) *A Natural History of Negation*, The University of Chicago Press, Chicago and London.
- Iwata, Seizi (1998) "Some Extensions of the Echoic Analysis of Metalinguistic Negation," *Lingua* 105, 49-65.
- 川瀬義清 (1989) 「Before 節における完了形と含意」『英語学の視点』大江三郎先生追悼論文集編集委員会編, 111-22. 九州大学出版会, 福岡.
- Kroch, Anthony S. (1974) *The Semantics of Scope in English*, Doctoral dissertation, MIT.
- Lasnik, Howard (1972) *Analyses of Negation in English*, Doctoral dissertation, MIT.
- 松村瑞子 (1989) 「非論理的過去完了形」『英語学の視点』大江三郎先生追悼論文集編集委員会編, 123-39. 九州大学出版会, 福岡.
- 大江三郎 (1982) 『動詞(I)』研究社出版, 東京.
- 太田 朗 (1980) 『否定の意味』大修館書店, 東京.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive*

Grammar of the English Language, Longman, London and New York.

Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1981) "Irony and the Use – Mention Distinction," *Radical Pragmatics*, ed. by Peter Cole, 295-318, Academic Press, New York.

Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell: Oxford.

Wilson, Deirdre and Dan Sperber (1988) "Representation and Relevance," *Mental Representations: The Interface between Language and Reality*, ed. by R. Kempson, 133-153, Cambridge University Press: Cambridge.

Wilson, Deirdre and Dan Sperber (1992) "On Verbal Irony," *Lingua* 87: 53-76.